

中世・ルネサンスの音楽

▶教科書p.84

新たに薔薇の花は
ここは畏れの多い場所である

戸作曲家

デュファイ (Guillaume Dufay, 1397? - 1474) は、フランドル (現在のベルギーとその周辺) 出身で、長くイタリアでも活動、中世の音楽を転換、ルネサンス様式の音楽を創始するうえで重要な役割を果たした。

戸楽曲について

ローマで教皇庁の聖歌隊に加わっていたデュファイは、フィレンツェの大聖堂がほとんど落成したのをうけて1436年3月25日に教皇により挙行された献堂式に聖歌隊とともに参加、その際にみずから作曲したこのモテットを演奏した。

四つの声部のうち上2声は、この祝典のための新作テキストに作曲し、下2声は、献堂式のためのグレゴリオ聖歌「ここは畏れの多い場所である」を4回、一定のリズム・パターンを繰り返しながら歌う。この手法は、異なる歌詞を同時に歌わせる方法とともに中世末の作曲法を継承したものである。4回繰り返される聖歌は、それぞれ長さが異なり、6対4対2対3という整数比になるが、それはこの大聖堂の、また旧約聖書に述べられたソロモン神殿の構造に通じるとする説がある。

大聖堂はサンタ・マリア・デル・フィオーレ (花の聖母マリア) と命名され、献堂式当日が聖母マリアのお告げの祝日でもあることから、上2声の歌詞は、教皇によりこの聖堂がマリアに捧げられるという内容になっている。

戸鑑賞のポイント

●デュファイが作曲した上2声の柔軟で華やぎと
ういういしさをもった旋律と、聖歌をもとにした
下2声はたいへん異なり、容易に違いを聴き取れる。
新しい時代を告げる出来事に際して演奏された
音楽もまた、過去のうえに新しさが響いている
ことを感得したい。なお、楽器を重ねたり、一部
のパートを楽器で演奏する場合もある。

(美山良夫)

おお、なんとよく響くこだま

戸作曲家

16世紀に活躍した多作で多芸な作曲家ラッソ (Orlando di Lasso, 1532?-94) は、フランドルの出身で、イタリアで音楽教育を受けた。1556年以降は没年までミュンヘンの宮廷に仕えた。仏、独、伊、ラテン語の知識を駆使した、機知に富む書簡が数多く残っており、ラッソの人柄をしのばせる。

宗教曲としてはミサ曲、受難曲、マニフィカト、モテットなどが、世俗曲としてはイタリア語のマドリガーレ、フランス語のシャンソン、ドイツ語の多声声楽曲などが残る。これは当時創作されていた音楽ジャンルをほとんど網羅している。

戸楽曲について

(1) 基本データ

- ・楽譜の初版年と出版地：1581年、パリ
- ・声部数：8声 (4声の二重合唱)
- ・演奏時間：約2分

(2) 評価と特色

16世紀に作曲されたイタリア語の歌詞による多声世俗歌曲は、一般にマドリガーレと呼ばれるが、この作品は歌詞と音楽の両面でマドリガーレよりも軽めの書法を取る作品集の中で出版された。

歌詞は、山びこに話しかけるという設定になっている。山びこ相手に楽しいやり取りをしようと元気に歌い出したが、結局、相手からは自分の言ったことしか返ってこないことに気づき、ぶぜんとしたところで曲が終わる。冗談好きのラッソらしい作品である。

(3) 構成

4声の第1コーラスが歌ったことを、最初から最後まで、同じ編成の第2コーラスが1小節遅れてオウム返しに繰り返す (教科書p.84の譜例を参照)。

戸鑑賞のポイント

- エコーの効果を楽しもう。 (園田みどり)